

まえがき

本書は、全7巻で構成される「認知日本語学講座」の第1巻であり、そのタイトルは『認知言語学の基礎』となっている。「認知日本語学講座」の企画意図としては、本書冒頭の「刊行にあたって」で説明されるように、「認知言語学の方法論と研究法を、主に日本語の具体的な分析に適用した研究書のシリーズ」であるという点に凝縮される。しかしながら、これを行っていくためには、認知言語学の研究領域においてこれまでに提起されてきた諸々の基礎概念を正確に理解した上でなければ、この種の適用はそもそも難しいものと一般に考えられる。したがって、「認知日本語学講座」の第1巻が果たすべき役割としては、最先端の知見をも含めた認知言語学の多種多様な基礎概念を、正確に且つわかりやすく読者に伝達するとともに、第2巻から第7巻で展開される「認知言語学的観点からの日本語分析」への橋渡しをすることにあると言える。この意味において、本書では、認知言語学の現状をできる限り正確に伝える目的で、認知言語学の研究領域で議論されてきた英語の現象を中心にして、認知言語学の基礎概念を紹介していく。

本書は全7章から成り、その構成は以下のとおりである。

第1章「認知言語学のアプローチ」では、認知言語学の研究には2つの大きな潮流があることを指摘しながら、認知言語学の基本的な考え方について概観する。

第2章「認知文法論」では、認知言語学における主要文法理論としての位置づけが高い、Langacker (1987, 1990, 1991, 2000, 2008, 2009, 2013) によって提唱されてきた認知文法の基本的枠組みについて概観する。具体的には、認知文法における言語構造の考え方、認知文法における文法カテゴリーの考え方、認知文法における句や節の分析法、認知文法における時制／アスペクト／モダリティの取り扱い方など、認知文法の核となるべき基本項目について紹介する。

第3章「認知意味論」では、認知言語学の領域において成されてきた代表的な意味論研究について紹介することで、認知意味論の基本的な考え方について概観する。具体的には、詳述性／焦点化／際立ち／パースペクティブ (Langacker 1987, 1990, 1991, 2000, 2008, 2009, 2013), 概念メタファー (Lakoff

and Johnson 1980, 1999), イメージ・スキーマ (Lakoff 1987; Johnson 1987), メトニミー (Lakoff and Johnson 1980, 1999) など, 認知意味論の核となるべき基礎概念を中心として, 概説を加える。また, 図地分化, 仮想移動, 動力学などの重要概念で知られる, Talmy (2000a, 2000b) の認知意味論研究についても, 簡単に紹介する。

第4章「認知語用論—概念ブレンディング理論入門—」では, Fauconnier and Turner (2002) によって提唱された概念ブレンディング理論の基本的な考え方について概観し, 認知言語学における語用論研究の一端を紹介する。くわえて, 概念ブレンディング理論の前提概念として重要度の高い, Fillmore (1982) のフレーム意味論と Fauconnier (1994, 1997) のメンタル・スペース理論についても概説する。

第5章「認知談話論—認知文法における照応研究を中心に—」では, 認知文法理論に基づく代名詞照応の研究として有名な van Hoek (1997) や Langacker (1996) などの議論を主として取り上げながら, 認知言語学における談話研究の一面を紹介する。また, Langacker (2001a, 2008: Ch. 13) で提示された, 認知文法理論における談話モデルの基本的な考え方についても概観する。

第6章「使用依拠モデルに基づく言語観」では, 認知言語学における言語使用論や言語習得論の中核として機能する, 使用依拠モデルの基本的な考え方について概説する。具体的には, スキーマ化 (Langacker 1987, 2008), 共通概念基盤 (Tomasello 2003), フレーム意味論 (Fillmore 1982), 意味と構文のネットワーク (Langacker 1987, 1991, 2008), 頻度効果 (Bybee 2007, 2010) などの議論を紹介しながら, 使用依拠モデルの重要性とその可能性について検討する。

第7章「認知言語学の展望」では, 認知言語学の近隣分野 (あるいは関連分野) への貢献性という観点から, 認知言語学における今後の研究の方向性について簡単に考察する。

なお, 本書の執筆分担は, 下記のとおりである。

碓井智子: 第2章, 第3章 (3.8節を除く)

田村幸誠: 第6章

安原和也: 第1章, 第3章 (3.8節), 第4章, 第5章, 第7章

最後に、本書の執筆の機会をご提供いただくとともに、原稿の完成まで絶えずご指導を頂きました編者の先生方に、著者一同、心より感謝を申し上げます。また、本書の刊行に向けて、編集作業の段階でいろいろとお世話になりました、くろしお出版の池上達昭氏にも、著者一同、心より御礼を申し上げます。本書が、認知言語学のさらなる発展に、少しでも寄与できれば幸甚である。

碓井智子
田村幸誠
安原和也

目 次

認知日本語学講座・刊行にあたって iii

まえがき v

第1章 認知言語学のアプローチ.....1

- 1.1 はじめに 1
- 1.2 認知言語学の五人衆 1
- 1.3 意味への認知的アプローチ 3
- 1.4 文法への認知的アプローチ 4
- 1.5 おわりに 6

第2章 認知文法論.....7

- 2.1 はじめに 7
- 2.2 認知言語学のパラダイム 8
- 2.3 経験基盤主義に基づく言語理論 10
- 2.4 認知言語学の文法観 12
 - 2.4.1 シンボリックユニットと文法カテゴリー 14
 - 2.4.2 スキーマを用いた記述 14
 - 2.4.3 シンボリック構造の統合 21
 - 2.4.4 合成構造とプロファイル決定子 23
 - 2.4.5 句の分析 25
 - 2.4.6 節の分析 26
- 2.5 時制とアスペクト 29
 - 2.5.1 従来の時制研究 29
 - 2.5.2 時制とグラウンディング要素 31
 - 2.5.3 従来のアスペクト研究 34
 - 2.5.4 認知文法論におけるアスペクト 36
 - 2.5.5 認知文法におけるモダリティ 38
- 2.6 おわりに 41

第3章 認知意味論.....	43
3.1 はじめに	43
3.2 認知意味論の言語観	44
3.3 概念化	45
3.4 認知意味論の道具立て	47
3.4.1 イメージ・スキーマ	47
3.4.2 ドメイン	54
3.4.3 基本ドメインと非基本ドメイン	55
3.5 概念内容と事態解釈	56
3.5.1 詳述性	57
3.5.2 焦点化と際立ち	57
3.5.3 トラジェクターとランドマークの配列	61
3.5.4 パースペクティヴ	62
3.6 メタファー理論	64
3.6.1 概念メタファー	66
3.6.2 プライマリー・メタファー理論	69
3.6.3 プライマリー・メタファーの実在性	71
3.6.4 写像の制約	73
3.6.5 メタファーとイメージ・スキーマ	76
3.7 メトニミー	78
3.7.1 メトニミーの下位分類	82
3.7.2 メトニミーと2種類の近接性	86
3.7.3 メトニミーと共起に基づくメタファー	90
3.7.4 メトニミーと様々な言語現象	92
3.8 Talmy の認知意味論	95
3.8.1 図地分化	95
3.8.2 前景化と背景化	97
3.8.3 視点	98
3.8.4 仮想移動	99
3.8.5 動力学 (力のダイナミクス)	100
3.8.6 動詞枠づけ言語と衛星枠づけ言語	103
3.9 おわりに	105

第4章 認知語用論 — 概念ブレンディング理論入門 —	107
4.1 はじめに	107
4.2 概念ブレンディング理論の背景	108
4.2.1 フレーム意味論	109
4.2.2 メンタル・スペース理論	114
4.3 概念ブレンディング理論の基本的枠組み	121
4.3.1 概念ブレンディングの構成原理	122
4.3.2 概念ブレンディングの具体事例	128
4.4 ブレンディング・ネットワークの分類	135
4.4.1 簡易ネットワーク	136
4.4.2 鏡像ネットワーク	137
4.4.3 単一化ネットワーク	139
4.4.4 複合化ネットワーク	141
4.4.5 ブレンディング・ネットワークのまとめ	143
4.5 概念ブレンディング理論の新展開	144
4.5.1 グラウンド・ブレンディング	145
4.5.2 概念分離のブレンディング	148
4.5.3 6 スペース・モデル	150
4.6 おわりに	154
第5章 認知談話論 — 認知文法における照応研究を中心に —	157
5.1 はじめに	157
5.2 参照点能力と代名詞照応	158
5.2.1 生成文法と代名詞照応	159
5.2.2 代名詞の意味合い	161
5.2.3 参照点機能から見る照応事実	166
5.2.3.1 プロミネンス	168
5.2.3.2 概念的結束性	173
5.2.4 参照点分析の利点	177
5.3 認知文法と代名詞照応	178
5.3.1 総称性と代名詞照応	178
5.3.2 数量詞と照応現象	182
5.3.3 非同一性指示	184

5.4	認知文法と談話モデル	186
5.4.1	現行談話スペース	186
5.4.2	談話の構造構築	189
5.5	おわりに	194
第6章	使用依拠モデルに基づく言語観	197
6.1	はじめに	197
6.2	言語記述につきまとう2つのジレンマと認知言語学の挑戦	198
6.3	規則・リストの誤謬とスキーマ形成	206
6.4	使用依拠モデルの本質と記号の内在的特性	219
6.4.1	言語のインフラ・ストラクチャー	219
6.4.2	フレーム意味論	228
6.5	意味と構文のネットワーク	236
6.5.1	構文ネットワーク記述の基礎	237
6.5.2	構文ネットワーク記述の利点：家族的類似性と頻度	242
6.5.3	文法への応用	250
6.5.3.1	認知文法における構文の着想	250
6.5.3.2	共時態は通時的变化のスナップショットである —「ら」抜き言葉の考察—	254
6.6	結語	264
第7章	認知言語学の展望	267
7.1	はじめに	267
7.2	今後の研究の方向性	267
7.2.1	認知社会言語学	268
7.2.2	認知修辞学と認知文体論	268
7.2.3	応用認知言語学	269
7.3	おわりに	269
参考文献		270
索引		284

第1章

認知言語学のアプローチ

1.1 はじめに

認知言語学 (cognitive linguistics) の研究領域は、1970 年代末頃から 1980 年代初頭頃にかけて萌芽してきた言語学の一分野であり、1990 年代に大きな進展を遂げ、現在に至っている (cf. Geeraerts and Cuyckens 2007)。その名称が示すように、最も簡単に言えば、認知言語学は、言語 (または言語現象) への認知的アプローチとして一般に規定していくことができる。なお、ここでいう「認知」とは、認知心理学 (cognitive psychology) の「認知」に近い意味合いを持ち、言語 (または言語現象) を一般認知能力 (general cognitive abilities) の反映として捉えていく言語観を指している。一般に、認知言語学の研究領域には、大きく分けて 2 つの潮流があり、そのうちの 1 つが「意味への認知的アプローチ」、そしてもう 1 つが「文法への認知的アプローチ」である (cf. Evans and Green 2006)。本章では、この 2 つの主要アプローチの概要を紹介しつつ、認知言語学の基本的な考え方について概観する。

1.2 認知言語学の五人衆

2 つの主要アプローチの概要を提示する前に、まず、認知言語学の研究領域を開拓してきたと考えられる中心的人物について、簡単に確認しておきたい。本書では、認知言語学の確立に向けて多大な貢献をしてきた研究者として、ジョージ・レイコフ (George Lakoff)、ロナルド・W・ラネカー (Ronald W. Langacker)、レナード・タルミー (Leonard Talmy)、チャールズ・フィルモア (Charles Fillmore)、ジル・フォコニエ (Gilles Fauconnier) の 5 人の名前を挙げ、「認知言語学の五人衆」と称しておきたい。

まず、ジョージ・レイコフは、我々の身体経験 (e.g. 知覚経験や運動経験

第2章

認知文法論

2.1 はじめに

産まれたばかりの子どもは、言葉を発することはできない。自らの意思を伝えることができず、泣くことで何かを欲していると他者に伝えようとする。日々の生活の中で様々な刺激を受け続け、ある日突然、人は言葉を発するようになる。言葉を発するまでに、個人差はあるが約18か月程かかると言われている。生後1～4か月頃に音素の区別がつくようになり、7～9か月¹には喃語を、1歳を過ぎると一語文を、1歳半～2歳頃になると二語文を発するようになり、この頃から文法らしきものが形成され始める。2歳半頃には三語文を発し、その後、言葉の爆発期と呼ばれる時期を迎え、爆発的に語彙量が増える。そして、5～6歳までには、基本的な文法を習得すると言われている²。約1年もの間、子どもは言葉を発することはなく、大量の刺激と情報の中から、自ら言葉と事態間の関連性を見出し、言葉を発するに至る。子どもがどのようにして言葉を習得していくのかは、未だ解らないことも多い。あまりにも身近な言葉という存在は、どのような構造を持ち、我々人間とどのように関わりあっているのだろうか。本節では2.2節で認知言語学の言語観を、2.3節で認知言語学の言語理論の根幹をなす経験基盤主義について、そして2.4節では認知言語学の考える文法体系と、スキーマを用い

1 生後9か月から12か月頃に乳児は、自分以外の意図を持つ存在を認識するようになると言われている。これを Tomasello (2008) は「9か月革命 (the nine-month revolution)」と呼んでいる。この時期を経て、乳児は、他者と共同注意を構築したり、他者と事物の関わり (三項関係) を学ぶようになる。この9か月革命は言語習得の重要な基盤となる時期であると考えられている。

2 幼児の第一言語習得のプロセスには、大きく4つの段階がある。その段階とは、「一語文期」(12か月頃)→「ピボット・スキーマ期」(18か月頃)→「アイテム・ベース構文期」(24か月)→「抽象的構文期」(36か月)である (Tomasello 2003: 114-136)。

第3章

認知意味論

3.1 はじめに

どれだけの人が、日々何気なく使う言葉の意味を考えながら使用しているだろうか。日常生活における言葉の役割は、自らの考えを聞き手に伝えるための道具であると一般的には考えられている。言葉の持つ内部構造や言葉の意味、その所在を考えながら日々言葉を使用している人は少ないだろう。このように、あまりにも身近である言葉自体が研究対象となったのは最近のことである。それ故、他の学問と比較すると言語学の歴史は浅い。しかし、言葉の表す意味とは何かという問いは古代ギリシャの哲学者アリストテレスの『命題論』冒頭までさかのぼることができる。『命題論』冒頭にこのような記述がある。「ところで音声〔声にされる言葉〕のうちにある様態は靈魂のうちにある様態の象徴であり、書かれたものは音声のうちにある様態の象徴である。そして、文字がすべての人々にとって同一ではないように、音声も〔すべての人々にとって〕同一ではない。けれども、それら2つのものがそのしるしであるところの最初のもの、すなわち靈魂の様態はすべての人々にとって同一である、そしてこの様態がそれらの類似物であるところの事物は、もちろん同一である¹。」このように、言葉の表す意味とは何かという問いは古代ギリシャの時代から人間の知的探究心を掻き立てていたことがわかる。この第3章の目的は、Langacker (1987, 2008) と Lakoff and Johnson (1980, 1987, 1999), Talmy (2000a, 2000b) を中心に、意味論の新たな潮流である認知意味論を紹介することである。Langacker と Lakoff は 1980 年代以降、認知意味論の発展に大きな貢献をした研究者である。本節では Langacker, Talmy の研究から認知意味論の基本概念を、Lakoff の研究からメタファー理

1 アリストテレス (1971) 『命題論』(「アリストテレス全集」1. 山本光雄訳) 岩波書店より。

第4章

認知語用論

概念ブレンディング理論入門

4.1 はじめに

Fauconnier and Turner (1994, 1998, 2002, 2006) によって提唱された概念ブレンディング理論 (Conceptual Blending Theory: 概念統合理論 [Conceptual Integration Theory] と呼ばれる) は, Fauconnier (1994, 1997) によって提案されたメンタル・スペース理論 (Mental Space Theory) における概念装置を基礎とした上で構造化された意味構築モデルの1つであり, とりわけ創造的な意味構築を取り扱うための認知モデルとして広く知られている。この理論的枠組みにおける基本的主張は, 意味構築 (meaning construction) には一般に創発的 (emergent) な側面があり, 単なる部分の総和以上の意味を結果づける概念統合に関与するという点である。すなわち, これは伝統的な言語学において暗黙のうちに仮定されてきた構成性の原理 (principle of compositionality) に対して強い疑いを投げかけ, 全体の意味が部分の意味の総和によって決定されるとするほうがむしろ例外的であることを顕著に表出した理論的枠組みであると言える。例えば, ミックスジュースというきわめて身近な例を考えると, 概念ブレンディング理論の要点は簡潔にまとめることができる [図1 参照]。今ここに, 2つのインプット (Input) としてオレンジジュースとリンゴジュースがあると仮定してみたい。このとき, この2種類のジュースをどういった割合で混ぜ合わせてミックスジュースを作るかで (選択投射 [selective projection] と呼ばれる), 最終的にブレンド (Blend) にでき上がるミックスジュースの味わいや風味は変容し, どちらのインプットにも存在しないミックスジュース特有の味わいや風味 (創発構造 [emergent structure] と呼ばれる) がそこに出現することになる。すなわち, 7:3 で混ぜ合わせる場合と 5:5 で混ぜ合わせる場合とでは, ブレンドに

第5章

認知談話論

認知文法における照応研究を中心に

5.1 はじめに

認知言語学におけるこれまでの言語研究では、Langacker (1987, 1990, 1991, 2000, 2008) の提案する認知文法 (cognitive grammar) の枠組みを中心として、名詞や動詞などの語レベルの議論、複数の語から成り立つ構文レベルの議論 (e.g. 句・節・複文) など、主として文文法 (sentence-level grammar) にその最大の関心が向けられてきたと言えるかもしれない。しかし、実際の言語使用においては、各々の文が結合することによって1つの一貫性ある談話 (discourse) と呼ばれるより大きな言語単位が存在してくることも、否定しようのない事実である。一般に、談話は文文法とは異なった独自の方法論や記述的道具立てを必要とすると考えられていたために、言語学分野においては文文法とは別個のトピックとしてしばしば理解される傾向があったと言える。しかし、昨今の認知文法理論においては、Langacker (2001a, 2008: Ch.13) などの研究に観察されるように、これまでの文文法中心の認知文法を、いかにして談話文法レベルをも取り込めるようにしていくかについて、活発な議論が出始めているのもまた事実である。Langacker (2008: Ch.13) によれば、談話レベルを取り扱うにしても、それはこれまでの認知文法で提案してきた以上の特別な道具立ては必要なく、また談話とそれよりも小さい言語単位がどのように異なっているかと問うたとしても、それはせいぜい単なる程度問題に過ぎないと主張するまでに至っている。本章では、談話レベルの現象とも密接に関係する、認知文法理論を援用した代名詞照応の研究に主として着目しながら、認知言語学における談話研究の一面を概観する。

第6章

使用依拠モデルに基づく言語観

6.1 はじめに

本章の目的は理論言語学における使用依拠モデル (usage-based model) という言語観を概観することにある。使用依拠 (usage-based) という用語は認知言語学を牽引してきたロナルド・ラネカー (Ronald W. Langacker) が¹, 認知文法の研究方針を解説する目的で書いた, 1988年の論文の中で造られた言葉である¹。その後, 認知言語学の領域を超え, 近年では広く, 機能主義類型論, コーパス言語学, また言語習得理論等でもその研究方針を示す用語として用いられるようになった (Barlow and Kemmer 2000; Croft 2001, 2003; Tomasello 2003; Deignan 2005; Beckner et al. 2009; Bybee 2010)。使用依拠モデルに基づく言語観を一言で表現するならば, 「言語に関して, 実際の観察・運用こそが話者に内在する言語・文法的知識を作り出す」ということになろう。イメージをつかんでもらうために, もう少し細かく述べると, 「我々は, 発話場面 (usage event) で実際に使われる言葉 (usage) を通じて言語の特性・特徴を1つひとつ学習し, それをもとに, 言語運用に必要な知識の体系を頭の中に構築していく」ということになる。以下では, より具体的に, 使用依拠モデルとはどのような考え方に基づく言語研究を指し, 今後どのような可能性を持つ研究方法であるのかを考察していく。

まず, 6.2節で古典的な文法に関する発想, つまり, 言語において, 「語彙」と「文法」を分けて記述することは必然的に2つのジレンマを文法記述にもたらすことを指摘する。次の6.3節では, 使用依拠モデルの中心的原理である, スキーマ形成 (・パターン形成) とその特徴を吟味することで, 言

1 Langacker (1988) "A Usage-Based Model," *Topics in Cognitive Linguistics*, 127-161. また, 'usage-based' に対して「用法基盤」, 「用法依存」という邦訳が与えられることもある。ここでは最も広く使われている訳語として「使用依拠」という訳語を採用した。